

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 14 日現在

機関番号：24201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520764

研究課題名(和文) 古代・中世における「乗り物文化」の学際的研究 - 『新・輿車図考』の構築を目指して -

研究課題名(英文) The interdisciplinary research about the Japanese culture of transport in 10-14 century

研究代表者

京樂 真帆子 (KYOURAKU, Mahoko)

滋賀県立大学・人間文化学部・教授

研究者番号：00282260

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,200,000円

研究成果の概要(和文)：平安貴族文化を象徴するものの一つに、牛車がある。また、牛車に乗るということは、ミヤコという都市文化を表すものでもあった。そこで、古代・中世貴族社会における「乗り物文化」研究のために、古記録、文学作品、絵画資料、考古資料などの整理・分析を行った。
その結果、牛車や輿は、乗る人の身分、財力、人脈などを可視化するものであり、また、人々に見られることを意識した都市文化を創り出したことを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The ox-drawn carriage, Gissya-the car used by nobility, is a symbol of the aristocratic culture in Heian period, 10-12 century. The taking a ox-drawn carriage is the symbolized culture in the capital Heian-Kyo. There were many kinds of the ox-drawn carriage, so the nobility used different carriage of the form and materials for rider's position and the purposes.
I arrange the data about the vehicle culture in the old recordings ex. Midou Kanpakuki, the diary of Fujiwara Michinaga, the classical literatures ex. the tale of Genji, the classical arts ex. the horizontal picture scroll, and the excavations ex. a wheel track.
As a result, I showed that the ox-drawn carriage and the palanquin are the tools for visualization of the position, the financial power and personal contacts of the riders in aristocratic society.

研究分野：日本古代史

キーワード：牛車 輿 平安京 都市文化

1. 研究開始当初の背景

平安時代の貴族の乗り物としてまず想起されるのは、牛に車を牽かせる牛車であろう。従来の牛車研究は、主として次の二つの観点から進められてきた。

まずは、物としての牛車研究で、主に画像史料の解説がおこなわれた。室町時代以降は乗用されることが稀となった牛車の現物は、近世のはじめ頃にはほぼ失われ、古代・中世の文献史料や絵画史料をもとに牛車の復元研究が積み重ねられることになった。その集大成が文化元(一八〇四)年に完成した松平定信編『輿車図考』であり、その附図は今も牛車のイメージ作りに活用されている。

もう一つは、故実・儀礼研究である。ここでは、乗り方、作法、身分規制などの解明から交通史研究への展開が図られ、さらには王権論と結びつく研究も現れた。そのなかで、乗車文化の進展が一〇世紀以降の昇殿制とかかわること、公家社会の変化が牛車の衰退につながったことなどが明らかにされてきた。

こうした状況を踏まえ、近年新たに都市論、首都論として牛車文化を読み解こうとする試みがなされている。牛車から輿への乗車文化の変化を公家と武家との関係性で解き明かす研究が現れた。

本研究は、こうした先行研究に学びつつ、「乗り物文化」研究のための基礎作業を行い、さらに、発展を目指した。

2. 研究の目的

本研究は、古代・中世の平安京・京都における支配者層(貴族・公家、武家、寺家など)の「乗り物文化」(牛車・輿などを使って移動するという文化)の文化的構造を、文献史学・日本文学・美術史学そして考古学の学際的共同研究によって明らかにするものである。つまり、平安京・京都における都市文化の成熟過程、その波及や展開について明らかにし、都市文化研究をより豊かにすることを目的とする。

具体的には、以下の2点を明らかにすることを目的とする。

『輿車図考』の再検討

これは、『輿車図考』の諸写本の校合、典拠となる古典籍との校合を行い、より正確かつ有用なデータベースを構築する。

『新・輿車図考』の構築

松平定信が使わなかった、かつ、使えなかった史資料(発掘資料や絵巻史料など)を整理することで、さらに意義あるデータベースを構築する。

3. 研究の方法

本研究は、文献史学・日本文学・美術史学そして考古学の学際的共同研究という方法で行う。各専門分野において、次の5の方法

で検討・分析を行った。

『輿車図考』の写本検討

『国書総目録』などにより、『輿車図考』を表題とする写本を収集し、原本の閲覧を行った。その上で、諸写本間の文字の異同を明らかにし、校合の結果をテキストファイルとしてまとめた。

『輿車図考』の典拠の再検討

松平定信が『輿車図考』の中で引用している古記録・古典籍の原典にあたり、引用の間違いや省略部分の確認を行った。

輿・牛車関連の古典籍の収集・検討

松平定信が『輿車図考』を完成させるための典拠とはしなかった文献を整理するため、国会図書館などに所蔵されている輿、車に関わる典籍の閲覧を行った。

新しい資史料の収集

松平定信が参照し得なかったデータ、つまり、発掘資料や絵巻などについて検討し、輿や牛車のデータを集めた。

集積史料の活用

以上の成果を踏まえ、実際に自ら史料を活用する実践を行った。

4. 研究成果

本研究の成果として、以下の9点をあげる。

『輿車図考』写本一覧

『輿車図考』の諸写本に関する情報を一覧としてまとめた。どの写本がどの部分を伝えるかを示す。

なかでも、『国書総目録』に記載の無い写本(早稲田大学図書館所蔵本)や、そもそも表題が異なる写本(坊城家本・彦根藩校本・輪池叢書本・宮内省本・松岡本)を発見できたことは大きな成果である。こうした新発見の写本をも含めて、『輿車図考』の原本や伝播について考える必要がある。

中世絵画に見る牛車・輿一覧

輿や牛車の図像は、絵巻などの絵画史料に多く残されている。そのうち、中世絵画にみられる輿と牛車の一覧を作成した。

この一覧を使うことで、乗り物に関する図像の探索が可能となった。

牛車に関する考古資料(発掘データ)一覧

牛車使用の痕跡は、地中にも残されている。それは、車輪などの遺物だけではなく、轍の跡などとして考古資料・発掘資料の中に存在する。膨大な量の発掘報告書をひもとき、牛車の痕跡を拾い上げた一覧である。

乗り物としての牛車(ぎっしゃ)と、荷運びの牛車(うしぐるま)との区別の方法

などについては、まだ仮説の段階であるが、痕跡の発掘状況をしることができる有用な一覧である。

足利義満の乗り物一覧

牛車から輿へと公家の乗り物が変化した中世京都において、一人の人間が生涯にどのように乗り物を変えていくのかを確認した。結果として、第3代将軍足利義満は、主として輿を使い続けたことが判明した。

牛車に関する古典籍一覧

『輿車図考』(文化元(1804)年完成)に至るまでの乗り物文化研究の軌跡を明らかにするため、牛車関連の古典籍一覧を作成した。本研究期間内に確認できたものは、89典籍に至った。その中で、中世に成立した『門室有職抄』の影響力の大きさや、古記録類などからの部類記作成の試みの存在を知ることができた。

『輿車図考』引用史料(中世編)一覧

『輿車図考』引用史料のうち、中世の古記録・故実書などに拠るものを掲出して一覧を作成し、うち鎌倉期のものを中心に公開されているものと校合した。これにより、『輿車図考』を構成する典拠史料が一覧できるとともに、引用の異同が明らかになった。

なお、この一覧は、後掲の成果「『輿車図考』本文データ」作成とは別個に行った作業で、一部、典拠としたものに違いがある。

『小右記』に見る藤原実資の「同車」の一覧

『小右記』から牛車で「同車」の記述を検出し、うち、記主藤原実資自身が他者と「同車」した事例について、同車者・同乗の経緯・出発場所・行き先などについて一覧を作成した。

その結果、同乗者のほとんどが親族に限られており、とりわけ養嗣子の資平の事例が圧倒的であることがわかった。

クルマについての研究メモ

これは、本研究の成果を活かした実践の一つである。『輿車図考』には見えない史料(絵巻など)や、諸外国の乗り物文化(ポンペイ遺跡など)との比較を行った。

『輿車図考』本文データ

これは、本研究の根幹となる成果である。故実叢書の『輿車図考』を底本として、諸写本や典拠原本との校合を行った。検索の便をはかるため、配布にはCD-ROMを用いた。

以上の成果を踏まえて、研究成果報告書を

作成し、データの公開を行った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計10件)

今 正秀、撰関政治史研究の視角、日本史研究、査読有、642号、2016、pp.29-50

今 正秀、菅原道真の「虚構」、日本歴史、査読無、800号、2015、pp.97-100

京樂 真帆子、都市空間の壁 平安京における都市壁の不在、Re、査読無、No.183、2014、pp.16-19

今 正秀、阿衡問題考、日本史研究、査読有、621号、2014、pp.1-24

今 正秀、阿衡問題と「文人」、日本歴史、査読無、793号、2014、pp.77-85

京樂 真帆子、歴史学と映画 『大仏開眼』と北山茂夫、人間文化、査読無、35号、2014、pp.2-15

千本 英史、鴨長明と『方丈記』、熊楠Works、査読無、41号、2013、pp.24-28

千本 英史、『今昔物語集』の近世期における引用について 『御伝絵視聴記』と『十六夜日記残月抄』の場合、叙説、査読有、40号、2013、pp.162-174

京樂 真帆子、都市・平安京における人的ネットワークの展開、中国 社会と文化、査読有、27号、2012、pp.90-107

京樂 真帆子、『輿車図考』の書写について 早稲田大学図書館所蔵本を中心に、人間文化、査読無、32号、2012、pp.12-23

[学会発表](計4件)

今 正秀、撰関政治史研究の視角、日本史研究会大会古代支部会関連報告、2015年10月11日、京都大学(京都府・京都市)

今 正秀、阿衡問題考、高円史学会大会、2013年11月30日、奈良教育大学(奈良県・奈良市)

今 正秀、阿衡問題と文人、広島史学研究会日本支部会、2013年10月27日、広島大学(広島県・東広島市)

千本 英史、南方熊楠と『方丈記』～その訳稿からみるディキンス交遊と那智隠棲～、南方熊楠顕彰会(招待講演)2012年10月27日、南方熊楠記念館(和歌山県・

白浜町)

〔図書〕(計5件)

仁木 宏編、吉川弘文館、日本古代・中世都市論、2016、pp.83-105

今 正秀、吉川弘文館、撰関政治と菅原道真、2013、238

三宅 和朗、吉川弘文館、環境の日本史 2 古代の暮らしと祈り、2013、pp.160-183

千本 英史、勉誠出版、「偽」なるものの「射程」 漢字文化圏の神仏とその周辺 (アジア遊学) 2013、269

今 正秀、山川出版社、藤原良房、2012、95

6. 研究組織

(1) 研究代表者

京樂 真帆子 (KYOURAKU, Mahoko)
滋賀県立大学・人間文化学部・教授
研究者番号：00282260

(2) 研究分担者

千本 英史 (CHIMOTO, Hideshi)
奈良女子大学・その他部局等・教授
研究者番号：50188489

岩間 香 (IWAMA, Kaori)
摂南大学・外国語学部・教授
研究者番号：50258084

今 正秀 (KON, Masahide)
奈良教育大学・教育学部・教授
研究者番号：70294270

(3) 連携研究者

山田 邦和 (YAMADA, Kunikazu)
同志社女子大学・現代社会学部・教授
研究者番号：30183685